

のことを聞き、別ルートに変えざるを得なかった。バス停に行く前に知ってまだ良かったが、すでに購入してあった高速バスの切符が無駄となってしまった。

東海北陸自動車道は愛知県一宮市から岐阜県を經由して富山県砺波市に至るもので、郡上八幡、高山、白川郷、五箇山などの以前は非常に遠かったところに行けるようになった。白川郷近くで天生峠（あもうとうげ）直下を貫く国内第2の長さの道路トンネルである飛騨トンネル（10,712m）建設が、大量の湧水に悩まされるなどの難しい工事となり、工期も当初より大幅に遅れ、全線開通は2008年7月となった。

そのほかJR岐阜駅と名鉄岐阜駅の間にある岐阜バスセンターより30分毎に郡上八幡行きのバスがでてゐる。

3. 吉田川と水路網

郡上八幡を流れる吉田川は長良川の支流である。島谷用水の堰があるところから急流となり、中心部の新橋では水面は12m下になる。そこでは淵とゆるやかな流れになり、飛び込みで有名な場所に。郡上八幡の子供達は最初もっと低い場所から飛び込みを始め、だんだん高さに慣れていく。いきなりの飛び込みは危険である。吉田川支流も旧市街ではけっこう深く流れている。

郡上八幡の水路は様々な水源から来ている。吉田川上流から北岸地域に来ている桜町用水、吉田川に流れ



写真-3 いがわ小径2

込む小駄良川上流からの北町用水、小駄良川の支流、初音谷川から来ている柳町用水、島谷用水など。

せせらぎの整備のきっかけは大火であった。承応1年（1652年）城下で起きた火事は、またたく間に燃え広がり、町を焼きつくしてしまった。第6代城主の遠藤常友は寛文7年（1667年）、綿密な計画のもと焦土と化した町の復興に着手した。4年がかりで小駄良川の上流3キロから水を引き入れ、城下の町並みにそって生活用水と防火用水を兼ねた縦横の水路を建設した。

4. いがわせせらぎ（島谷用水）

吉田川の堰から取水された島谷用水がけっこうな水



図-1 郡上八幡のせせらぎなど 水路図は昭和52年頃のもの
 出典 「水路の親水空間計画とデザイン」渡部一二著 技報堂出版
 吉田川をはさんで昔からの街の至る所にせせらぎが。カワドは洗いのこと

量で川に沿って流れ、その横に1m幅くらいのいがわ小径が続いている。17世紀中頃、足軽屋敷街につくられたのがはじまり。

所々にカワドと呼ばれる洗濯や野菜などを洗う屋根付きの水洗い場がある。いがわ小径は中心街の郡上八幡旧庁舎記念館裏を少し上流に歩いたところからはじまる。上流に歩いて行くとひなびた風景が続く。お金がかかっているわけではないのだが、石垣、竹堀、植え込み、小さな構造物など、カメラを向けるのにいい多数の場所がある。小径は100mくらい行ったところで途切れる。はじめて訪問したときに、その途切れた場所で、吉田川の方に歩くなどうろうろしていたら、他の観光客にここで終わりですかと聞かれ、そうでしょうと答えてしまったが、あとで少し上流の八幡小学校くらいから、吉田川の堰まで、景観は下流にかなわないが370mくらい、せせらぎ沿いの小径が続いているのが分かった。江戸時代から日本の多くの都市では同様に用水が都市用水と灌漑用水とを兼ねて有効に使われていたのであろう。しかし、近代化に伴い、水道管による給水、産業化や、都市への人口集中により水需要が急増し、流れる水が枯渇し、また生活様式の変化による汚水の増加によって多くの町でドブ川になってしまい、道路の整備の際、蓋がかけられて目に見えなくなっていくのだろう。郡上八幡では水が豊富にあったため、水路が残ったものと考えられる。

いがわせせらぎが街の中心街を通る時、水位は吉田川及び流入河川よりはるかに高くなり、流入河川の乙姫川横断部は水路橋になっている。このせせらぎは下流の水田の灌漑用水として使われている。



写真-4 いがわ小径3 上流の方

5. やなか水のこみち

下見板張り壁の前を流れるせせらぎと地元吉田川、長良川の小石を敷きつめた石畳の小道。せせらぎはいがわせせらぎの分水のようである。石のオブジェ、小さい橋などがあり、長さは30mと短い。道の両側におもだか家民芸館と斎藤美術館がある



写真-5 やなか水のこみち

6. 柳町用水・北町用水

吉田川の北にある町並みで側溝にせせらぎが流れている。水量も多い。側溝にこのようにせせらぎが流れているところは全国広しといえども高山など非常に珍しい。ただ高山では郡上八幡のように豊かな流れはみられない。

狭い側溝で、水路の分岐や合流があるので流れの複雑な管理が必要になる。堰からの水量は変動するだろうし、何らかのことで流れが悪くなると溢れ出してしまふ。常に流れの状況を見ていて、必要な作業を行わなければならない。柳町を歩いていて、ある家の前に柳町川掃除当番という大きな看板があるのを見つけた。



写真-6 休憩場所 長敬寺前

当番制でしっかりとした管理が行われている。

郡上八幡の街が形成された頃、城下の中心部は現在の北町（吉田川の北側）で、武家屋敷と商家と寺院が配置されていた。残念ながら大正八年（1919年）夏の大火によって北町全域が燃えてしまった。現在の建物はそれ以降に建てられたものであるが、けっこう時代を感じさせる建物が多い。

小駄良川そばにある長敬寺山門前に道路が少し引込んだところがあり、北町用水からの心地よいせせらぎも道路にあわせて曲がって流れ、植え込みがあり、水路には小さな置物が置かれていた。このちょっとしたスペースにお休みどころのように長いすが置かれていた。ちょうどその前がだんご屋さんになっていて、一休みするのがいい。

7. 宗祇水（白雲水）

郡上八幡ではあちこちに湧水がみられるが、代表的なものが宗祇水。小駄良川が吉田川に流れ込むすぐ近くにある。道路から石畳の道を下り、また階段を降りたところに祠があり、その下から湧水がわき出している。湧水は少し流れて、すぐ小駄良川へ。



写真一七 宗祇水

宗祇水の名の由来は、連歌の宗匠として知られた飯尾宗祇が15世紀後半、この泉のほとりに草庵を結んで、この清水を愛用したところから名付けられたもの。

時の郡上城主、東常緑は武家歌人として知られており宗祇は古今集の秘事を伝授してもらったため文明3年（1471年）からおよそ3年にわたって訪れ、帰路につく宗祇を送った常緑が、泉のほとりで饞別に歌を送り、宗祇は、返歌を詠んだとされ、歌も残っている。以後、江戸時代、遠藤常友によって整備され「白雲水」と命名された。大正8年、有志で宗祇倶楽部が結成され、後、宗祇水奉賛会が引き継ぎ宗祇水を守っている。昭

和60年には全国名水百選として環境庁の指定を受けた。

8. 水舟

郡上八幡特有の水利用のシステムで、湧水や山水を引き込んだ二槽または三槽からなる水槽のうち、最初的水槽が飲用や食べ物を洗うのに使われ、次の水槽は汚れた食器などの洗浄に使われる。そのほとんどは個人の家の敷地内にあるのでなかなか目にふれることはないが、観光用などに設置されたものが町のところどころにある。



写真一八 水舟

9. 郡上八幡城

ひとときわ高い山の上であり、城下の町並みを一望することができる。永禄2年（1559年）遠藤盛数が東殿山（市街地南方）の東家を滅し八幡城を築いたのがはじまり。しかし、秀吉が天下を統一の際、領地二万石を没収せられて加茂郡小原に封じられてしまった。かわりに稲葉右京亮貞通が城主となり城郭を修築して天



写真一九 古い街並み 北町で

守台を設けた。天守台の石垣のほとんどの部分は、天正16年（1588年）ごろに稲葉貞通の大改修の際に築かれたもので、戦国時代の荒々しさを偲ばせる野面積（のづらづみ）と呼ばれる工法によるもの。

その後関ヶ原の合戦で遠藤慶隆は家康に味方し、再び慶長五年（1600）遠藤氏が城主に返り咲いた。

内助の功で有名な山内一豊の妻千代は1556年（弘治2年）初代郡上八幡城主遠藤盛数の長女として生まれたとされる。

千代が6歳の時に父盛数は病死、その後母の再婚、義父の敗北、そして流浪、波乱の人生のあと、千代は尾張の山内一豊の許へ嫁ぐことになる。

一豊は織田信長、豊臣秀吉、徳川家康と時の覇者たちに仕え、最後には土佐藩24万石の大名にまでのぼりつめたが、その影には妻である千代の功があったといわれている。城山のふもとには一豊と千代の像が置かれている。



写真-10 吉田川 新橋下流。
すぐ上流とちがい緩やかな流れに

元禄五年（1692年）遠藤氏は後嗣なく没収せられ常陸より井上正住が城主（四万石）となって来封したが間もなく金森頼錦の晩年になって失政のため農民困窮甚しく、ついに金森騒動宝暦義民の一揆が起り、そのため一家は断絶され、丹後国宮津の城主青山幸道が代って郡上藩主となって藩政を安定させた。

明治4年（1871年）廃藩置県とともに廃城となった城は翌年から石垣を残してすべて取り壊されることになる。

現在の4層5階の天守閣は昭和8年（1933）に当時国宝であった大垣城を参考にして2つの隅櫓と高塀とともに全国にさがけて再建されたもの。当時の財力がしのばれる。古図にあるようなかつての3層の天守閣とは異なるものとなっている。

10. 郡上踊り

有名な郡上踊りは4百年の歴史を持つ。4代城主遠藤慶隆は城下町の整備に力をいれ、神社の建立や寺院の開基につとめた。またそれまであちこちで踊られていた盆おどりをひとつにして城下で踊ることを奨励し、士農工商の融和、人心の懐柔をはかった。

開催期間はお盆を中心に7月中旬から9月上旬まで2ヶ月近く、街のあちこちで延べ32夜にわたる。特にお盆の4日間は明け方まで盛大に踊り明かす。

踊りは会場の中央に据えられたおどり屋台（やかた）を中心に輪を作って通常の盆踊りのように踊る。やかたには唄を唄う音頭とり、囃子方が陣取る。

ここでは「見るおどり」ではなく「踊るおどり」といわれ、観光客が地元の人と一緒に一つの輪になって踊る楽しさがある。唄は、かわさき、春駒、三百、やちちく、げんげんばらばら、猫の子等10以上あって、テンポの早いもの遅いものを組み合わせで繰り返し踊る。動作は難しくなく、初めての人でも気軽に輪の中に入って行ける。郡上踊りの季節に一度行ってみたいものである。



写真-11 安養寺前のせせらぎ
柳町用水がここに流れてきている

11. おわりに

郡上八幡は古い街のたたずまいとせせらぎ網が訪れる人々の心をとらえ、現代に残された貴重なところである。かつては交通の要衝であったが、開発の波に飲み込まれなかったため、昔のものが多く残っている。

このせせらぎが郡上踊りとともにずっと残ることを祈るものである。